

令和5年度 学校教育自己診断 [報告]

【教職員用】・【保護者用】

【児童・生徒用】

令和5年12月実施

報告日：令和6年2月22日

大阪府立中央聴覚支援学校

令和5年度学校教育自己診断報告

学校教育自己診断は、学校の教育活動が幼児児童生徒の実態や保護者の学校教育に対するニーズ等に対応しているかどうかについて、アンケートに基づいて診断し、本校教育改善のための方策を明らかにするものである。

本校では、「そう思う」「だいたいそう思う」を肯定的評価、「あまり思わない」「思わない」を否定的評価として、今後の方策について検討する。

個別に分析した以下の各項目の左に記した◎○△は、各項目の肯定的評価度を表している。

◎－肯定的評価が大きく向上した。

○－肯定的評価が高い。

△－肯定的評価が前年度より減少した。

1 教職員アンケートについて (回答率 98%)

多くの項目で肯定的評価が前年度を上回った。今年度は新型コロナウイルス感染症の取り扱いの5類移行を受け、かなりの教育活動が以前のようにできるようになった。このことにより、教職員全体が、子どもたちにとってよりよい教育についてあらためて再検討し、努力研鑽を行ったという気持ちが現れていると考える。

- ① 項目 1 「学校の教育活動について、教職員で日常的に話し合っているか」 (○)
R5 (87%) R4 (86%) +1%

- 項目 13 「学校には、管理職と教育活動について話ができる機会や場がある。」 (○)
R5 (66%) R4 (65%) +1%

新型コロナウイルス感染症の取り扱いが5類に変更となったことで、かつて行っていた取り組み内容の何を引き継ぎ、何を刷新しよりよい形にしていくのか、これまで以上に教員間での話し合いが必要となった一年だったが、教職員は多忙な中でそれに向き合ってきたと思われる。学部間の連携の必要性を含めた教員同士の交流・研究活動・話し合いは子どもたちの成長にとって重要であり、今後も日常の話し合いを大切にできるよう心がけたい。

項目 13 については前年度大幅に改善していたが、今年度も肯定的評価は前年度の水準を維持している。また、否定的評価は4%減と、全体としてやや改善がみられる結果となっている。今後も、教育活動について管理職と話ができる組織を確立していきたい。

- ② 項目 2 「学校は教育活動全般にわたる評価を行い、次年度の計画に生かしている」 (◎)
R5 (84%) R4 (75%) +9%

- 項目 3 「学校は諸活動において防災に関する取り組みや安全指導を行っている」 (◎)
R5 (96%) R4 (91%) +5%

項目 8 「私は、学校行事が幼児・児童・生徒にとって魅力あるものとなるよう、工夫・改善を行っている。」 (◎)

- R5 (96%) R4 (90%) +6%

項目2は昨年度、前年度比6%増であったが、今年度はさらに進んで肯定的評価が9%増となっている。否定的評価も12%減となっており、昨年度に比べて顕著な前進が見られたと言える。

項目3について、今年度は、これまでよりもさらに実践的な避難訓練も新たに始めるなど、防災に関する取り組みはさらに深化している。

肯定的評価が前年度よりさらに5%増えていることに加え、そのうち「そう思う」が15%増と大幅な伸びを見せており、今年の取り組みが昨年度以上に充実したものであったことがうかがえる。担当分掌を中心とした積極的な取り組みの成果が実ったと考えられる。

項目8は、昨年度も前年比11%の肯定的評価増加であったが、今年度はさらに18%増という大幅な改善が見られた。新型コロナウイルス感染症の5類移行により、どのような形で行事を行うのが子どもたちにとってよいのかを、教員全体であらためて考え直した結果が現れているものと考ええる。

- ③ 項目5「私は、幼児・児童・生徒一人ひとりが興味・関心、適性に応じて進路選択ができるようきめ細かい指導を行っている。」 (△)
R5(86%) R4(89%) -3%

進路選択へのサポートやキャリア教育に関わる項目である。肯定的評価は前年度より3%減であるが、対して否定的評価の割合は全体で約10%と変わっておらず、「わからない」と回答した割合の増加による変化である。総体として肯定的評価は8割以上を維持しており、今後もさらにきめ細かく、個々の子どものニーズに合わせた丁寧なサポートを行っていくことが求められる。

- ④ 項目7「学校は、教育相談体制が整備されており、幼児・児童・生徒は学級担任以外の教職員とも相談することができる。」 (△)
R5(75%) R4(78%) -3%

昨年度に比べ、肯定的評価が3%減となっている。同時に否定的評価も5%減となっており、その分「わからない」の割合が相対的に増している。引き続き、子どもの小さな変化を見逃さず、学校全体で協力しながら支援していく体制を強化していきたい。

- ⑤ 項目11「私は、前年度より必要な視覚支援やICT機器を活用した授業を行い、専門性を向上させることができた。」 (○)
R5(77%) R4(78%) -1%

今年度は肯定的評価が1%減となっているが、授業等での活用は明確に進んでおり、その内容は充実していきいていると思われる。オンライン授業やGIGAスクール構想による幼児児童生徒一人1台端末配備に伴う今後のICT関連授業のあり方、本格的に運用が開始されたGoogle for Educationの使用について、今後も、教職員自身が習熟していけるように取り組むたい。

急速に変化する時代の中で、子どもたちに育むべき資質・能力の一つとして、ICT活用力は欠かせない。子どもたちに有効な活用方法を提示し、ICTの活用によるわかりやすい授業で子どもたちの学ぶ力を育成できるよう、研修等を通じて指導者としての専門性の向上を図りたい。

2 保護者アンケートについて (回答率 64%)

昨年度は肯定的評価がとても高くなったので、今年度は一部で肯定率を下げたものもあるが、80%を超えているものも多く、その水準を概ね維持することができていたと思われる。今年度の教育活動にも、日頃からご理解をいただいていたことがうかがえる。来年度は回答率をさらに向上させられるよう、締切前の再度の呼びかけ等も行っていきたい。

- ① 項目1 「お子さんは、学校へ行くのを楽しみにしている」 (◎)
R5(90%) R4(85%) +5%
- 項目7 「学校や先生たちは、教育の情報について提供の努力をしている。」 (◎)
R5(90%) R4(85%) +5%
- 項目8 「学校の授業参観や学校行事に参加したことがある。」 (○)
R5(96%) R4(92%) +4%

項目1は、肯定的評価の増加と併せ、否定的評価が8%減少しており、日々の子どもたちの様子から楽しんで学校に通ってくれていると感じる割合が増えていると考える。また、積極的な情報発信の姿勢にも非常に高い評価をいただいている(項目7)。ここ数年来の来校が制限されていた状況から変化したことから、以前のように比較的安心して来校していただける状況になりつつある(項目8)。今後も教職員が協力しながら、幼児児童生徒が学校での学びを楽しみにできるよう、引き続き教育活動について検討を深めていきたい。

- ② 項目2 「お子さんは、授業が分かりやすく楽しいと言っている」 (○)
R5(77%) R4(77%) ±0%
- 項目4 「学校や先生たちは、将来の進路や職業などについて適切な指導を行っている」 (○)
R5(77%) R4(77%) ±0%

両項目とも昨年度大幅な伸びを示した項目であり、今年度もその水準を維持することができた。また、否定的評価の割合も減少しており、さらに改善の傾向にあると判断できる。来年度以降、8割の肯定的評価を達成できるよう、わかりやすい授業、体系的なキャリア教育について取組みを進めていきたい。

- ③ 項目3 「学校の生活指導、生徒指導の方針に共感できる。」 (△)
R5(83%) R4(86%) -3%

肯定的評価が3%減であるが、「わからない」の割合が2%増加しており、総体としては8割以上の肯定的評価を維持している。引き続き、子どもたちがいきいきと過ごせることを目指した生活指導、生徒指導について全教職員で協力して取り組んでいきたい。

- ④ 項目5 「学校や先生たちはいじめや子どもが困っていることがあれば真剣に対応してくれる。」 (○)
R5(82%) R4(83%) -1%

肯定的評価が昨年度比1%減である。同時に否定的評価も1%減であり、相対的に「わからない」が増えている。肯定的評価は8割を維持しており、引き続き、日頃から

の信頼感を積み上げていながら、子どもたちの悩みに寄り添う姿勢を感じてもらえるように努力していきたい。

- ⑤ 項目 6 「学校や先生たちは、お子さんに生命を大切に作る心や社会ルールを守る態度を養おうとしている」 (△)
R5 (87%) R4 (93%) -6%

肯定的評価が 6%減少しているが、否定的評価よりも「わからない」の割合の増加が高い結果となっている。肯定的評価は昨年度 14%と大幅増を示した項目であり、今年度も 9割近い肯定率を維持している。今後も他者とのつながりの中で生きる自己という存在について意識できる働きかけを継続していきたい。

- ⑥ 項目 9 「学校や先生たちは、一人一台端末(タブレット)を積極的に活用している。」 (△)
R5 (64%) R4 (67%) -3%

昨年度新設した項目であるが、今年度は肯定的評価が 3%の減少となった。

否定的評価は前年度比 3%増加し、「わからない」が 1%増加であった。全体的にやや後退している結果となっており、来年度への課題であると考え。今後も、授業での活用を増やしていくことを進めながら、子どもたちがタブレットを用いた家庭学習を日常的にできるような取組みについて、次年度はさらに取り組んでいきたい。また、研修等で教職員がさらに ICT を活用した学びを充実させるスキルを高め理解を深めたい。

- ⑤ 項目 10 「学校や先生たちは、お子さんの障がいについてよく理解している。」 (△)
R5 (88%) R4 (94%) -6%
- 項目 11 「学校や先生たちは、日常の教育活動において、お子さんの人権を十分に尊重している。」 (△)
R5 (89%) R4 (95%) -6%

ともに肯定的評価が前年度比 6%減の項目であるが、肯定率としてはいずれも 9割近くあり、今後も引き続きその維持向上を心掛けていくことが望まれる。聴覚障がいをはじめとした子どもたちの障がい理解についてさらに深めるとともに、人権を最優先に尊重した指導・対応について、引き続き保護者の皆様に理解していただけるよう、取組みをさらに進めていきたい。

3 児童・生徒アンケートについて (回答率 92%)

昨年度児童用と生徒用に項目を分けたことに続き、今年度はさらに児童用を【小1～小4】【小5・小6】に分けて、その違いに着目した。その結果、それぞれの年齢段階を経て発達していく子どもの姿がより明瞭に結果に現れた。ここでは、児童生徒をまとめた形で、前年度との比較報告を行う。

- ① 項目 1 「学校に行くのが楽しい」(小学部)
「学校に行くのが楽しい。または学校生活は充実している。」(中高)
R5 (82%) R4 (74%) +8% (◎)

今年度、【生徒用】の質問に「または学校生活は充実している。」という文言を付け加えた。このことにより、中学部以上の生徒にとって「楽しい」という評価軸だけではない学校生活に対する個々の見方を回答に反映させることができた。小学部の数値は横ばい傾向である。

小学部の児童においては、小1～小4と小5・小6を分けて回答を集計しており、それぞれの発達段階での回答の違いがはっきりと現れた。単純な数値比較は難しいが、小1～小4段階までは学校生活が「楽しい」と感じているのに対して、小5・小6ではそれが数値の上では減少することが見て取れる。この年代では思春期を迎える前段階において、自我の目覚めとそれに伴う保護者や教員、友人など周囲の人々との関係の変化、や葛藤などが影響しているとも考えられる。

ただ、アンケート結果なので、発達段階によるものなのか、個々の児童が抱える課題なのか読み取ることは難しい。この状況を教職員間で共有して見守るとともに、児童の話をきき、気持ちに寄り添うを粘り強く続けていきたい。また、この学年については、次年度もアンケートを分析していきたい。

- ② 項目2 「授業が分かりやすい」
R5(86%) R4(80%) +6% (◎)
- 項目3 「先生は私たちのことを大切にしている」
R5(88%) R4(76%) +12% (◎)
- 項目4 「いろいろな仕事について勉強したり見学に行ったりしている」(小学部)
「将来の進路や生き方について考える機会がある」(中高)
R5(82%) R4(77%) +5% (◎)

項目2は中高において「授業が分かりやすい」と感じる生徒の割合が増しており、個々の教員のたゆまぬ日々の教材研究等の努力の成果だと思われる。

項目3は前年度と比べ、最も大幅な伸びを示した項目である。同時に、小学部全体で見ると、昨年度の結果よりも肯定的評価が大幅に増えている。それぞれの子どもにとって必要な葛藤の期間を、よりゆとりを持って一人ひとりに向き合い、気持ちに寄り添った丁寧な指導や支援を大切にしていけることを、教職員全体の共通理解事項としていきたい。

項目4においても小学部全体として考えるとやや上昇傾向にあり、中高の結果と併せても、学校全体ではキャリア教育の取り組みは前進していると評価できる。

今後も授業や特別活動や行事の中でその活動の目的を子どもたちにより明確に伝え、子どもたち自身が自己の将来像を広げることにつなげられるよう、引き続き、取り組みを進めていきたい。

- ③ 項目5 「先生はいじめや私たちが困っていることがあれば真剣に話を聞いてくれる。」 (△)
R5(72%) R4(76%) -4%

昨年度に比べ肯定的評価が4%減となっており、対して否定的評価と「わからない」がそれぞれ約2%増という結果である。またこの結果は、項目3「先生は私たちのことを大切にしている。」が12%増と大幅に伸びていることと対照的である。

加えて、小1～小4においては否定的評価が0%であり、小5以降での心身の成長に伴って生じてくる悩みや葛藤について、それをどのように表出するかという思

春期を通じた子どもたち自身の課題ともかかわってくると考えられる。

引き続き、先生が大切にしてくれているという子どもたちの実感を基礎に、困ったときには寄り添い、見守ってくれる存在となれるよう、努力していきたい。

- ④ 項目 6 「担任の先生以外にも他のクラスや保健室等で、気軽に話ができる先生がいる。」 (○)

R5(73%) R4(69%) +4%

中高においては顕著な前進が見られ、学級を越え、多くの教職員が連携して子どもたちの悩みに応えようとしている姿勢や、日常の関係性を大切にしていることが子どもたちにも前年度以上に実感されていると思われる。子どもたちが悩みを抱えた時、それを受け止め、チームで見守ることができる教職員集団が構築できるよう、さらに協力を深めていきたい。

- ⑤ 項目 10 「先生の話（声・口形・手話・指文字など）はわかりやすい。」 (△)

R5(88%) R4(91%) -3%

肯定的評価が前年度比3%減である。また、否定的評価についても前年度比1%減であり、「わからない」が相対的に4%増となっている。全体としては、9割前後の肯定的評価を維持しており、引き続き、子どもたちに伝わりやすいコミュニケーションを心掛け、スキルの向上を目指していきたい。

- ⑥ 項目 11 「先生は私達のきこえにくさについてよく理解してくれている」(小)
「先生は私たちの障がいについてよく理解してくれている」(中高)

R5(83%) R4(84%) -1% (○)

肯定的評価が小学部1～4年では非常に高い結果であったが、全体としては前年度比1%減との結果となった。同時に、否定的評価も前年度比5%減となっており、対して「わからない」が6%増という結果となった。思春期が始まる小5以降の子どもにとって、聴覚障がいを自身がどのようにとらえていくかは自らの実存にとって大変大きなテーマであり、それを周囲の大人との関係の中で形成していくうえで、教員の存在意義は大変大きいと考える。

引き続き障がい理解に関する研鑽を積むとともに、一人ひとりの子ども達を大切に、それぞれの子どもが今求めていることは何かを注意深く見極め、個々のニーズに寄り添った教育を進めていきたい。

- ③ 項目 12 「社会見学や交流会などの学習は楽しい。新しいことを知れた。」(小学部)
「他校や地域との交流や発表に参加してよかった。」(中高)

R5(83%)

今年度より新設の項目である。地域社会や他校の子どもたちとの交流によってより広く他者とかかわり、つながっていくことを学ぶ活動によって、ともに同じ社会に暮らす存在として互いを認識していくことに直結する。そのため、今後はこうした視点からも子どもたちの学びを見つめていきたい。

- ⑧ 項目 13 「地震や火事の時のひなんのルールを知って守ったり、登下校時に交通ルー

ルを守ったりしている。」(小学部)

「避難訓練や安全教育を学び、普段から安全に対する意識が向上した。」(中高)

R5(81%)

今年度より新設の項目である。南海トラフ大地震やその他の災害、または危険な事態が起きた際にどのように行動すればよいか、確実な力を育めるように繰り返し学んでいくことは大切である。今後もより実効性の高い安全に関する取り組みを続けていきたい。

4 教職員・保護者比較について

教職員アンケートと保護者アンケートの質問項目のうち、内容が近い項目について比較検討したものを記載する。

① 進路指導に関する項目

教職員の肯定的評価が86%であるのに対し、保護者の肯定的評価は77%と約1割の差が出ているが、昨年度も同程度の開きがみられた。一昨年度までが約2割であったことを考えると、教職員と保護者の捉え方について以前と比べて共通理解が進んできているといえる。進路指導やキャリア教育について、本校の取り組みへの理解が進んでいることがうかがわれる。

今後も「保護者とともにすすめるキャリア教育」を意識して、個別懇談会、見学会等でより具体的な情報を提示しながら、保護者の想いに寄り添いつつ、引き続き協力して取り組んでいく。

② いじめに関する項目

肯定的評価は教職員86%、保護者82%とあまり差がみられない。また、この数値は昨年度とも大きく変わらないものである。それぞれ一昨年度が8割弱であったことを考えると、この面においても昨年度以来、学校の取り組みについて肯定的な評価が進んでいるととらえられる。

いじめ問題に関しては、子ども間の小さなトラブル等を察知する力を伸ばすとともに、教職員が組織的に対応できる力を伸ばしてきた。また、いじめ問題に関連する教育は、教科学習時、総合的な学習や道徳、生活指導時等はもちろん、学校活動の全ての場面で指導を行っているので、この取り組みを継続していく。

③ 教育情報に関する項目

教職員の肯定的評価が83%で前年度と変わらない結果であるのに対し、保護者の肯定的評価は90%と5%向上している。一昨年度は教職員の肯定的評価が6割強、保護者の肯定的評価は7割強だったことを考えると、それぞれの肯定的評価が飛躍的に向上していることと併せ、よい傾向が持続しているといえる。各学部で迅速にブログ更新ができるようにするなど仕組みの改革などに努めたことにより、教職員の意識も向上していると思われる。また、5月から正式運用が始まったさくら連絡網の活用により、円滑かつ効率的な教職員・保護者相互の情報交換が可能となったことも大きい。今後もきめ細かい相互のやり取りを継続していきたい。

④ 障がい理解に関する項目

教職員が97%、保護者が88%の肯定的評価を行っている。保護者においては昨年度比6%減となっているが、いずれも高い評価であると言える。今後も懇談等で保護者との関わりを密にしながら、一人ひとりに合った支援を継続していく。引き続き校内外の研修機会や研究会等の紹介などを通して理解を深めていきたい。

⑤ 人権に関する項目

教職員においては99%、保護者では89%が肯定的評価を行っている。特に教職員においては、肯定的評価のうち「そう思う」の割合が8%以上向上しており、この面においても人権尊重の意識が向上したととらえられる。一昨年度から昨年度においても「そう思う」が14%増加しており、ここ2年での教職員の意識の変化が顕著であるとする。保護者への情報発信を継続するとともに、引き続き今後も子どもたちの人権を尊重した教育活動を行っていきたい。

⑥ ICT（タブレット）を活用した学びの充実に関する項目

教職員では視覚支援やICT機器を活用した専門性の向上について問い、保護者にはタブレットの活用について問うているので、この評価の差について述べることはできない。しかし、肯定的評価が教職員において77%、保護者で64%にとどまっており、これらは前年度の数値と比べて少し減少している。

教職員において授業内でのタブレット端末の活用は明らかに進んでいる。昨年より課題となっているタブレットの持ち帰り・家庭学習での活用は今年度進めることができなかつたので、次年度の課題とする。また、授業内での活用については、見学の機会を増やすなどして、保護者理解を進めていきたい。

今後も、子どもたちに育むべき資質・能力の一つとしてICT活用力を伸ばすことと、「個別最適な学び」「協働的な学び」「主体的な学び」を实践する1つの方法としてタブレット端末を有効活用できるように教員が専門性を高め、子どもたちへその活用について示していきたい。